

# 漢文『四面楚歌』定期テスト対策問題 | 書き下し・現代語訳・句法の頻出設問と解答 解答・解説

---

## 問1 へきす

〈解説〉「壁」は名詞「かべ・とりで」から転じて「とりでを築いて守る・立てこもる」という動詞として用いられ、「壁す」と読む。

## 問2 (イ)

〈解説〉直前で項羽の軍は劣勢に追いこまれており、「壁す」は垓下にとりでを築いて立てこもる意。「兵少なく食尽く」という苦境とも合う。

## 問3 みなそかするを

〈解説〉「楚歌す」で「楚の地方の歌をうたう」の意の動詞。四方の漢軍がそろって楚の歌をうたっているのを聞いた、という場面である。

## 問4 (例) 四方を敵の漢軍に囲まれ、助けも逃げ場もない状況。(二十二字)

〈解説〉敵に四方を囲まれ、味方がなく孤立した状態を指す。後の「故事成語」の意味(問24)と区別して、本文の場面に即して書く。

## 問5 (例) 漢軍はもうすっかり楚(の地)を手に入れてしまったのか。

〈解説〉「已に」は「すでに・もう」、「得たるか」は「手に入れてしまったのか」。楚の歌が四方から聞こえることから、楚がすでに漢に降伏したと項羽が受け取った場面。

## 問6 (イ)

〈解説〉文末の「乎」は疑問・反語などを表す助字。ここは項羽が「楚はもう漢のものになったのか」と問いかける疑問の用法。

## 問7

1 疑問形(「何～也(や)」の形)。「何ぞ～や」(文末に「ん」がないので反語形ではない。ここでは詠嘆に転用——小問2参照)

2 (例) 詠嘆(感嘆)。四方から楚の歌が聞こえる以上、楚人が漢側に多くいることを項羽はすでに察しており、ここは理由を尋ねているのではなく「なんと楚の人が多いことか」と驚き嘆いていると読むのが自然だから。

〈解説〉「何ぞ～や(也)」は文脈により〔疑問〕「どうして～か」、〔反語〕「どうして～だろうか、いや～ない」、〔詠嘆〕「なんと～であることよ」のいずれにもなる。ここは絶望の場面なので詠嘆でとるのが一般的。

## 問8 (例) これはなんと楚の人の多いことか。

〈解説〉詠嘆「何ぞ～や」を「なんと～であることよ」と訳す。

問9 (例) 四方から楚の歌が聞こえたことで、味方であるはずの楚の人々までもがすでに漢に降伏したと悟り、自分が完全に孤立したと感じたから。(約五十六字→四十字に圧縮可)

※四十字での解答例:(例) 四方の楚歌から、楚の人々まで漢に降ったと悟り、もはや味方がなく孤立したと感

じたから。(約四十字)

〈解説〉「楚歌」が項羽に「楚の陥落＝孤立」を悟らせた点を必ず入れる。

#### 問10 ここにおいて

〈解説〉「於是」は「ここにおいて／そこで」と読み、場面の転換を示す。

#### 問11

・虞……項羽が常に寵愛して連れていた女性（美人）。いわゆる虞美人（虞姫）。

・騅……項羽が常に乗っていた愛馬（駿馬）の名。

〈解説〉項羽が最後まで手放さなかった「愛する人」と「愛馬」。詩の中で項羽が気づかう対象でもある。

#### 問12 おおう

〈解説〉「蓋」は「おおう」と読む。氣力が世の中全体をおおいつくすほど盛んだ、の意。

問13 （例）山を引き抜くほどの力と、世をおおいつくすほどの氣力を備えた、英雄としての並外れた力強さ（自負）を表している。

〈解説〉かつての項羽の絶大な武勇・氣概を示す句。第二句以降の「時利あらず」と対比され、その落差が悲劇性を高める。

#### 問14

1 読まない。

2 （例）句の途中や句末に置いて語調をととのえ、詠嘆の気持ちを添える助字（リズムを生む置き字）。

〈解説〉「兮」は楚辞（そじ）に多く見られる助字で、訓読では読まず、感嘆・調子をととのえる働きをする。

#### 問15 いかんすべき

〈解説〉「可奈何」で「いかんすべき」。どうすることができようか、の意。

#### 問16

1 若……虞（虞美人）を指す。「若」は二人称「なんじ（おまえ）」。

2 反語。

〈解説〉「若（なんじ）を奈何せん」は「おまえをどうしてやることができようか、いや、どうしてやることもできない」という反語で、虞への深い愛情と無力感を表す。

問17 （例）虞よ、虞よ、いったいおまえをどうしてやればよいのか（どうしてやることもできない）。

〈解説〉愛する虞を守ってやれない項羽の無念・絶望を読み取る。反語として「どうすることもできない」という含みを出すとよい。

#### 問18

（例）文末で「いかん」と読むときは「どうであるか・どうしようか」と状態や方法を問う。目的語をともなって「～をいかんせん」と読むときは「～をどうしたらよいか（どうにもできない）」と、その対象の処置を問う（しばしば反語となる）。

〈解説〉「奈何（いかん）」は手段・状態を問い、「(目的語)を奈何せん（いかんせん）」は対象の処理を問う形。詩の「騅の逝かざる奈何すべき」「若を奈何せん」はいずれも後者に近く、なすすべがない心情を表す。

### 問19 (イ)

〈解説〉かつて「力は山を抜き気は世を蓋ふ」とうたわれた英雄が、時運に見放され、愛する虞すら守れない無念と絶望を歌った詩である。

問20 (例) 項羽の悲嘆に虞も唱和し、項羽は涙を流し、側近たちも皆泣いて顔を上げて見ることもできないほど、深い悲しみに包まれた様子。

〈解説〉英雄項羽が涙を流す異例の場面で、別れと敗北の悲哀が極まっていることを示す。

問21 (例) (涙のために) 顔を上げてまともに見ることのできる者は一人もいなかった。

〈解説〉「能く～莫し」は「～できる者がいない」。「仰ぎ視る」は顔を上げて見る。皆が泣きうつむく様子。

### 問22

1 史記

2 司馬遷 (しばせん)

3 項羽本紀 (こううほんぎ)

〈解説〉『史記』は前漢の司馬遷が著した歴史書。皇帝・帝王の記録を「本紀」といい、項羽は皇帝ではないが例外的に「項羽本紀」として立てられている点も問われやすい。

### 問23 (イ)

〈解説〉『史記』は、本紀 (帝王)・世家 (諸侯)・列伝 (個人) などを中心に、人物の伝記を軸として歴史を記す「紀伝体」で書かれた最初の歴史書。年代順に記す(ア)編年体 (『春秋』など) と区別する。

問24 (例) まわりがすべて敵・反対者ばかりで、味方や助けが一人もいない、孤立無援の状況。

〈解説〉本文の「四方を漢軍に囲まれた」場面 (問4) から転じて、現在は比喩的に「周囲がみな敵で孤立すること」を表す故事成語として使われる。